[四季録原稿（25）]
大樹から襟裳まで

初めて北海道に渡ったのは、一九七五年のことだ。大阪から青森までは夜行列車の“日本海”で行き、青森からは青函連絡船に乗った。さらに列車を乗り継いで、一足先に来ていた熊谷先生たちと札幌で合流した。どのくらい時間を要したかさだかでないが、「はるばる北の大地へ来た」という実感は身をもって迫って来た。

札幌の道庁と地裁で所蔵資料と裁判記録を閲覧したあと、帯広経由で広尾線の大樹（たいき）に向かった。三月の末というのに、辺りは雪一色で、背の低い建物は完全に雪に埋もれている。南国育ちの私には、初めて目にする光景だった。ちなみに、広尾線は一九八七年廃止となり、今はない。

大樹では営林署を訪れるのが、目的だった。当日は公労協の統一交渉日に当たっていて、署内では全林野と団体交渉中だったが、はるばる大阪から教授が来られたということで、交渉を一時中断し、急遽講演会が開かれることになった。先生は、自然破壊から林野を守る意義や明治のはじめアイヌが土地を収奪されていった過程などを、ゆったりと話された。署長はじめ署員の参加者は神妙に聞いていたが、これが終わると、また労使に分かれて団交を再開すると聞いた。

その夜は、営林署の宿舎に泊めていただいた。エゾシカの肉を食べたことも忘れられない。鍋を突つきながら先生が、「エゾシカは保護獣で、きみたちのような若いシカは撃ったらいかんのだが、私のように生殖能力を失ったやつは撃ってもいいんだそうだ」と何度も言うのもおかしかった。

翌日、われわれが札幌まで帰るのを、「折角だから襟裳岬廻りで行ったらどうですか」と、署員が車で送ってくれることになった。広尾を過ぎると海岸沿いの道となり、切り立った崖と荒波の打ち寄せる荒涼たる景色がどこまでも続いた。

襟裳岬は風がことのほか強かった。強い風に髪が巻き上げられ、頭はパイナップルのようになった。このときすでに森進一の「襟裳岬」はヒットしていたが、岬にはまだ島倉千代子の歌碑しかなかった。